

ガンジーとの対話

—教育について—

豊田 千代子

はじめに

本稿は、イギリス帝国の植民地であったインドを独立に導いたマハトマ・ガンジー (Mohandas Karamchand Gandhi 1869 - 1948) を取り上げ、ガンジーの教育思想について検討するものである。

ガンジーは植民地下で抑圧されてきたインドの人々の解放に向けて闘った社会運動家として著名であるが、ガンジーの取り組みの中には教育も含まれていた。ガンジーは教育についてどのように考えていたのだろうか。それは現代社会を生きる私たち、とりわけ教育に関わる者にどのようなメッセージをもたらすのだろうか。これらについて考察してみたい。

しかしながら、ガンジーの教育思想を理解するのは容易でない。第一に、それを理解するには、ガンジーの生き方全体を知る必要があるからである。第二に、ガンジーの教育への取り組みが多様であり、その全体像を把握することが難しいからである。ガンジーは、教育に実践的に関わるとともに、演説や著書を通じて教育についての見解を述べている。活字化されたものは膨大であり、それら全体の把握には困難を要するのである。

一番目については、マイケル・N・ナグラ (Michael・N・Nagler) が、エクナット・イーシュワラン (Eknath Easwaran) 著『人間ガンディー』に

おける「イーシュワランのガンディー像」の中で、「かれ（筆者注：ガンジー）の全体を理解しなければ、部分も理解できない」⁽¹⁾ことを指摘している。ナグラーによれば、「政治、経済、平和、健康などの領域においてガンディーが成し遂げたひとつひとつのことは、ガンディーを部分的に表すもの」⁽²⁾でしかない。ナグラーは、ガンジーによる「わたしの人生は分かつことができないひとつであり、すべての活動はお互いにつながっています……」⁽³⁾を引いている。そして、「ガンディーの真の業績は、ある特定の分野にあるのではなく、すべての人々にとってもっとも大切な仕事、すなわち『どのように自分を作っていくか』ということにあるのです」⁽⁴⁾と述べている。これらのナグラーによる記述は、ガンジーの教育論のみを特立して考察することの限界を示すものだろう。

ナグラーが述べるように、ガンジーの真の業績が「どのように自分を作っていくか」にあるのなら、何よりガンジー自身の生き方、自己形成のありようを理解することが不可欠となる。そして、ガンジーの教育思想は、それらと結び付けることによって初めて理解できると言えるだろう。

二番目については、弘中和彦が、ガンジーとラビンドラナート・タゴールの教育論を紹介した『万物帰一の教育』の「まえがき」で、「ガンディーとタゴールには共に、夥しい教育論ないし教育上の見解がある。ことにガンディーには数百の論が存在する」⁽⁵⁾と記している。ガンジーの教育についての見解は、講演・演説の内容が掲載された機関紙など、著書以外でも広く見ることができるのである。また、ガンジーの教育思想の基礎となった、ガンジー自身の携わった教育実践も多様である。

ガンジーのこのような教育についての取り組みは、ガンジーの教育に対する関心の大きさを物語るものであるが、同時に、ガンジーの教育思想の全容を把握することの難しさを示すものでもある。そうした困難については、弘中が「ガンディーは教育の分野に大きな足跡を残した」⁽⁶⁾としてガンジーの教育への多様な関わりを記した次の文章からも伺うことができるだろう。

その主なものに言及すれば、フェニックス・セツルメントやトルストイ農園で、子供たちの教育にたずさわった。チャンパーランの農民のために学校を設けた。「国民教育」運動を組織し指導した。一般の人々や学生と頻繁に会い、教育について話し、相談に乗り、書面によって所信を明らかにした。その著書『ヒンド・スワラージ』や『自叙伝』にも見られるが、機関紙『インディアン・オピニオン』、『ヤング・インディア』、『ハリジャン』、『ナヴァジーヴァン』等において教育上の見解をしばしば公にした⁷⁾。

ガンジーの教育思想を理解するのは容易くない。本稿では、ガンジーと対話を重ねながら理解していきたい。まず最初に、ガンジーの生き方の基盤となっているものを取り上げる。次にそれを踏まえて、ガンジーの教育思想について検討する。ここでは『ガンジーの教育論』(M・K・ガンジー著、片山佳代子編集・翻訳、ブイツーソリューション発行、星雲社発売、2009年)及び弘中和彦による研究に基づいて述べていく。最後に、ガンジーの教育思想の現代的意義について考察する。

1. ガンジーの生き方

ガンジーの思想を知るには、幾つかの用語が手掛かりとなる。筆者は、拙稿「ガンジーの思想について」で、インド独立運動を展開したガンジーについて「非暴力を掲げ、糸紡ぎという手仕事を軸に運動を進めた」と述べ、「スワラージ(自治)」、「アヒンサー(不殺生・非暴力)」、「チャルカ(手紡ぎ車)とカディー(手紡ぎ・手織りの綿布)」を取り上げた⁸⁾。そこでは直接言及しなかったが、これらはガンジー自身の生き方と深く関わっている用語と言える。

以下では、あらためて次の三つの観点からガンジーの生き方を照らし出してみたい。

(1) 「真理」探究の実験

ガンジーは、生涯を通じて政治や教育等の分野において様々な取り組みを行っているが、それらはガンジーにとって「真理」*を探究する「実験」であった（* 次のように「真実」と訳されることもある）。ガンジーは、自分の生涯が「真実に関する実験」だけでできあがっていることを『ガンジー自伝』の「はしがき」で告白している⁽⁹⁾。また、このことを象徴するかのよう
に、ガンジーは自伝に「真実をわたしの実験の対象として」という副題をつけている。ガンジーは「真実こそ、ほかの無数の原則をそのなかに含んでいる大原則」であると言う。そして、その真実とは、言葉の使いかたや考えかたにおける誠実さ、「私たちの真実に関する相対的な観念」だけでなく、「絶対の真実、永遠の原則、すなわち神でもある」とガンジーは述べている⁽¹⁰⁾。

ガンジーはまた人生の目標についても鮮明に述べている。

わたしがなしとげようと思っていること—ここ 30 年間なしとげよう^{モクシヤ}と努力し、切望してきたことは、自己の完成、神にまみえること、人間解脱に達することである。この目標を追って、わたしは生き、動き、そしてわたしの存在があるのである。語ったり、書いたりするやりかたによるわたしの行為のいっさいと、政治の分野におけるすべてのわたしの冒険は、同じ目的に向けられている⁽¹¹⁾。

ガンジーにとって「自己の完成、神にまみえること、人間解脱に達すること」という目標は、「絶対の真実、永遠の原則、すなわち神」である「真実」を実現することなのだろう。ガンジーの人生は、「真理（真実）」探究の実験なのであった。

(2) ギターへの信奉

ガンジーはインドの古典『バガヴァッド・ギター』を信奉していた。

『人間ガンディー』の著者イーシュワランによれば、ガンジーはイギリス留学中に友人たちとギターを読みはじめており、この時のことをガンジー

は「初めてギターを読んだとき、言葉がすっと心に響いてきた」と回想している⁽¹²⁾。ギターは「幼い頃よりずっとガンディーの身近にあった書物」⁽¹³⁾なのだが、この時ガンジーはギターと出会ったのである。イーシュワランはギターのガンジーへの影響について次のように述べている。

ギターの教えが、さらにガンディーの行動に影響を及ぼしはじめたのは、南アフリカでのことである。真理の探究を深めていくにつれ、ギターはガンディーにとって「精神の参考書」、遭遇する危険やチャレンジへの実用的な手引書となっていった⁽¹⁴⁾。

イーシュワランは、続けてガンジーを引用しつつ、ガンジーにとってのギターの存在の大きさを語っている。ガンジーは、自分にとって「ギターは行為の絶対的な指針」、「日常生活のための辞書」となったと述べるのである⁽¹⁵⁾。ガンジーは「あらゆる問題や試練に対する答えを見つけるために、この『行為の辞書』を繰り返しました」⁽¹⁶⁾と言う。また「アパリグラハ（無所有）やサマバヴァ（平静）といった言葉が心をとらえました」⁽¹⁷⁾と述べるとともに、「問題は、どのようにすれば平静な心を養いそれを維持することができるかということです」⁽¹⁸⁾とガンジーは述べ、さらに記述を続けている。その中で、ガンジーは「ギターに説かれている無所有の意味が、理解できたのです」⁽¹⁹⁾と述べ、その中身を明かしている。

ガンジーの人生が真理を探究する実験であることは既述の通りであるが、真理の探究を深めるにつれてギターはガンジーにとっての精神面・実用面での拠り所となっていったのである。

(3) アヒンサー（非暴力）

ガンジーを語る際に忘れてならないものに「非暴力」がある。非暴力は「インド独立の父」としてのガンジーをイメージする際に、恐らく誰もが筆頭に挙げるものだろう。そして、その主なイメージは、支配国であるイギリスに対して暴力を用いない、すなわち武器で闘わない、というものではなからう

か。

ガンジーは、不殺生・非暴力を「アヒンサー」という言葉で示しているのだが、この言葉は実はとても奥が深い。「愛」に貫かれた概念なのだ。

筆者は前稿で、ガンジーの考える「アヒンサー」とは、暴力を用いない（武器を用いない、肉体的制裁を加えない）以外に、搾取や抑圧をしない、さらにはすべてを排除しないという意味であると捉えた⁽²⁰⁾。だが加えて強調されるべきは、これらに通底する「愛」、愛という力だろう。

これについて、イーシュワランが『人間ガンディー』の中で言及している箇所がある。イーシュワランは、「強い者にとって、非暴力を実践するのは簡単なことだと、ガンディーはよく言っていた」⁽²¹⁾と述べている。これに続けてイーシュワランは、「非暴力の実践が不可能なのは、弱者である。なぜなら非暴力というのは、自分を憎む人を愛する強さであり、もっとも手強い敵対者に対して、忍耐と理解を示す力だからである」⁽²²⁾と述べるのである。さらに、非暴力とギターとの関係に触れて、「これがバガヴァッド・ギターに、『勇者を見たければ、人を許すことのできる人を見なさい。英雄を見たければ、憎しみに愛で報いることのできる人を見なさい』と書かれていることの意味である」⁽²³⁾とイーシュワランは書いている。

ガンジーが提唱する非暴力は、「自分を憎む人を愛する強さであり、もっとも手強い敵対者に対して、忍耐と理解を示す力」なのである。ガンジー自身、「きわめて積極的な力」であり「臆病さや弱さが入り込む隙間はありません」⁽²⁴⁾と述べている。さらにイーシュワランは、「聖書に『完全な愛は恐れをとり除く』とあるが、アヒンサーとはこの『完全な愛』にほかならない。それは単なる感傷的な愛からほど遠いもので、生涯を通じて取り組むべきチャレンジであり、自己との闘いでもある」⁽²⁵⁾と書いている。

なお、ガンジーは南アフリカやインド本国でのインド人に対する差別や抑圧に抗して不服従運動（受動的抵抗）を展開したのだが、その運動は「サティヤグラハ」と呼ばれた。これはガンジーが名づけたものであり、「サティ

ヤ」＝「真理」、「アグラハ」＝「堅持」から「真理の堅持」を意味した⁽²⁶⁾。そして、このサティヤーグラハは「アヒンサー（非暴力）」の精神を伴っていた。イーシュワランは「サティヤー（真理）」と「アヒンサー（非暴力）」との関係について、ガンジーにとってそれらは『コインの裏表』のように、ある経験に基づいた事実に対する二つの見方であった⁽²⁷⁾と述べている。また、サティヤーについて、ガンジーにとってそれは『すべての命はひとつ』という、存在のもっとも深い真理を意味するものだった⁽²⁸⁾とも言う。イーシュワランによれば「サティヤーグラハは、どのような状況においても、どれほど激しい嵐のなかであっても、『真理』を堅持するという意味⁽²⁹⁾なのである。そして、真のサティヤーグラハ信奉者は「自分自身のために何も欲することがないため、敵意も、恨みももたず、暴力的な言葉に頼ることもなく、まわりの人々のためなら、どんな争いに巻き込まれることも恐れない」し、「激しい挑発を受けたときも、『攻撃する者』と『攻撃される者』とがひとつだということを決して忘れない」のである⁽³⁰⁾。そしてまた、「これこそがアヒンサーの真の意味⁽³¹⁾だとイーシュワランは言う。つまり、「アヒンサーとは、ただ単に『暴力のない状態』のことではなく、『熱烈な愛そのもの』⁽³²⁾だとイーシュワランは強調するのである。ガンジーが提唱する「アヒンサー（非暴力）」は、不可分な関係にある「サティヤーグラハ（真理の堅持）」と併せて理解することで本質を捉えることができるだろう。

ガンジーの人生の目標である「真理」の実現、そしてそれに向けての「真理」の探究、また、真理の探究においてガンジーの精神的・実用的拠り所となったギター、さらに、真理と密接な関係にある「アヒンサー（非暴力）」——ガンジーの生き方はまさに自らの精神性を高めることを目指すものだったのだろう。そして、だからこそガンジー自身が述べているように、ガンジーの「人生は分かつことができないひとつであり、すべての活動はお互いにつながって」いるのだろう。また、精神性を高める生き方を貫いたガンジー

の真の業績は、ナグラが指摘したように「すべての人々にとってもっとも大切な仕事」である「どのように自分を作っていくか」ということにある、と言えるだろう。

ところで、この「どのように自分を作っていくか」という人間形成のあり方は、教育の中核となるテーマである。ここでのガンジーの生き方を踏まえて、以下ではガンジーの教育思想について述べてみたい。

2. ガンジーの教育思想

ガンジーの教育思想の特徴は、手仕事の重視、とりわけ糸紡ぎの重視にある。また、それを通して人格の形成、全人の形成を目指した点にある。こうした特徴をもつ「ガンジーの教育思想は生涯にわたる進化発展の跡をとどめる」⁽³³⁾のであり、ガンジー自身が関わった様々な教育実践等によって展開されたものなのであった。

弘中は「マハトマ・ガンジーの『手仕事を通しての教育』の意味について」で、ガンジーが南アフリカ滞在中に設立したフェニックス農場（フェニックス・セツルメント）やトルストイ農場（トルストイ・ファーム）での教育実践や、1915年のインド帰国後にガンジーが取り組んだ教育活動（チャンパランでの村落学校開設、「国民教育運動」の推進とその一環としての国民学校の設立化、ガンジーが議長を務めた1937年のワルダーにおける「国民教育会議」での演説による教育計画の提案〔同会議の決議で「ベイシック・エデュケーション」が確立〕等）を追いながら、手仕事を中心に据えたガンジーの教育思想の形成過程の全容を明らかにしている⁽³⁴⁾。

これらの中で、1937年は、ワルダー会議でガンジーが演説し、ガンジーの教育思想の集大成とも言える教育計画を示した重要な年であった。弘中によれば、「この会議はガンジーがこれ迄主張してきたことの確認を意味するが、この会議及びその前後にガンジーが一番力説したのは『手仕事を通しての教育』であり、「それは全人の形成のための手仕事に基づく教育システムの提

案と云う意味を持っている」のであった⁽³⁵⁾。

以下では『ガンジーの教育論』をもとに、ガンジーの教育観を探ってみよう。

(1) 西洋式教育の批判

① 伝統文化の否定

ガンジーは、イギリスの植民地下で行われてきたインドの教育を強く批判している。西洋の価値に基づく教育が行われ、インドの伝統的な教育が断ち切られてしまっているからである。ガンジーは、インドの伝統文化から切り離された形の教育によって、子どもの育ちが歪められている状況を嘆いているのである。

ガンジーは、「教育は、伝統文化から（筆者補足：子どもたちを）引き離すことを目的に練られて」いると言う⁽³⁶⁾。学校教育を受けた結果、子どもたちが親の仕事を価値の劣るものと見做し、仕事を継がなくなってしまう状況を取り上げ、ガンジーは、自分の置かれた環境に誇りをもてなくさせ、家庭から子どもを引き離してしまうような教育のあり方を問題視しているのである。

ガンジーは、インドの学校には、いろいろな職業カーストに所属する少年たちがいる（煉瓦工、鍛冶屋、大工、仕立て屋、靴屋など）が、「教育を受けたら、自分たちがこれまでやってきた仕事の技術を高め、自らの仕事にさらに励んでいくのではなく、そのような仕事は何か劣っていることとしてやめてしまいます。そして、事務職に就くことが名誉なことと考えるのです」と述べている⁽³⁷⁾。加えて、「両親も、このような誤った考えを共有」していると指摘している⁽³⁸⁾。

そして、こうした誤った認識をもたらしている西洋式の教育について、ガンジーは、教科書の問題に触れている。「教科書は、子どもたちが家庭でいつもやっていることではなくて、子どもたちにとって全く未知の事柄を扱っています」⁽³⁹⁾と述べて、教科書の内容が家庭という子どもたちの生活世界から

切り離されていることをガンジーは問題と見做すのである。また、ガンジーは学校での教育について「彼が置かれている環境について誇りを持つようにはまったく教えられません。上の学校に進めば進むほど、家庭から引き離されてしまいます。そして教育を終える頃には、周囲から全く浮いてしまいます」⁽⁴⁰⁾と批判している。

85%から90%の人々が農業従事者であるインドにおいて、事務職員が養成されるだけの英国式教育が行われ⁽⁴¹⁾、その中に農民や前述の職人の子どもたちが取り込まれていく状況をガンジーは訴えたかったのである。

伝統文化を否定した西洋式のインドの教育が、子どもたちに自分たちの「村が持つ文明は、低級で野蛮で、迷信に満ちており実用の役に立たないもの」⁽⁴²⁾という認識を植えつける役割、すなわち伝統文化から子どもたちを引き離す役割を果たしていることをガンジーは示して見せた。そこでガンジーが言いたかったのは、おそらく、インド古来の教育の目的が「共同体の一員として生活を続けていける人を養成」⁽⁴³⁾することにあり、教育は肉体労働の尊厳や自分たちの置かれた環境の中で育つことへの誇りを伝えるものとして機能していたのに対して、西洋式教育ではそうになっておらず、子どもの育ちが歪められてしまっているということなのであろう。

②西洋式教育への盲目的崇拝

ガンジーは、文字の読み書きや外国語についても取り上げ、西洋の価値に基づく教育の問題を指摘している。読み書きや英語そのものではなく、それらの教育への盲目的崇拝をガンジーは批判しているのである。

i)文字の読み書きの教育

まず文字の読み書きの教育についてだが、ガンジーは関連し合う二つの観点から批判的な見解を述べている。一つは教育の捉え方であり、もう一つは読み書き中心の教育への盲目的な崇拝である。

ガンジーは、人格を養うことを教育の目的と考えている。そのようなガンジーは、「文字が読めて書けることだけが教育」となっている現状を指摘し、それでは教育は「単なる道具」だと批判的している⁽⁴⁴⁾。教育が文字の読み書きと同義に捉えられてそのための道具となっていることに対して、ガンジーは教育とは何かという根本的な問いを投げかけているのである。

ガンジーはまた、「通常教育と言えば、文字を知っているかどうか」を指すことや、「子どもたちに読み書き及び算術を教えることが、初等教育」と呼ばれているという現状を説明するとともに、農夫を例に次のように述べて、インドがこうした教育を無批判に取り込んだことを問題とした⁽⁴⁵⁾。

農夫はまっとうに働いて糧を得ます。世間一般について知っています。両親、妻、子ども、仲間の村人に対してどのような態度を取るべきかよくわきまえています。道徳的な教えを理解し、それを守っています。しかし、自分の名前を書くことはできません。このような人に文字を教えることで、何をしようというのでしょうか⁽⁴⁶⁾。

ガンジーは、このような農夫に対して文字の読み書きの教育が必要なわけではないと考えている。人格を養うことが教育の目的であるガンジーからすれば、農民として立派な人間に成長する上で読み書きの教育は必ずしも不可欠ではないということなのだろう。そして、こうしたガンジーの教育観に関わって、ガンジーが何より問題としたかったのは、「洪水のように押し寄せてきた西洋的な考えに押し流されて、ことの良し悪しを吟味することもせず、私たちはこのような種類の教育を与えるべきだ」という結論を下して」しまったということなのである⁽⁴⁷⁾。

ii) 外国語による教育

次に外国語について、ガンジーはインドの高等教育が英語で行われてきたことによる弊害を指摘している。「外国語で行われているために、この国に計り知れない知的及び道徳的損害を与えて」といるとガンジーは言うのである⁽⁴⁸⁾。

そして、「授業の媒体言語をすぐに、どんな犠牲を払ってでも変える必要」があり、「各州の言葉に正当な地位を与えるべき」と主張するのであった⁽⁴⁹⁾。

ガンジーによれば、「大学在学中は、知識の基盤を固めさらに強固にしていくなものと思われて」いるが、「実際には、その逆で、私たちは自分の母国語を忘れていくようになる」という⁽⁵⁰⁾。また「多くの学生が、自分の母国語を恥ずかしいと思うようになる」ともいう⁽⁵¹⁾。これは道徳的損害を示す例であろう。また、学生は意思疎通につたない英語を用いるようになるものの、「いろいろな科学技術の専門用語を表現する言葉を作り出せてもいなければ、英語の技術用語を完璧に理解しているわけ」でもなく、「大学教育を終了する頃には、私たちの知性は輝きを失ってしまい、肉体は衰えて」と、ガンジーは述べている⁽⁵²⁾。これは知的損害を示すものだろう。

ガンジーはまた、家族や使用人や洗濯屋等に学校で得る知識がいきわたっていないと述べている⁽⁵³⁾。そして、それは「我々が英語で学んでいることを彼らに伝えることができないから」とガンジーは言う⁽⁵⁴⁾。英語の使用によって他の人々と知識を分かち合う体験ができなくなってしまう状況を含めてガンジーは知的・道徳的損害と捉えているのだろう。

ガンジーによれば、大学卒の仲間たちは、母国語の語彙が乏しいために、自分の考えを表明する必要に迫られた際に言葉につかえてしまう⁽⁵⁵⁾。彼らは「故郷にいながらも部外者」⁽⁵⁶⁾なのである。これもまたインド人である「我々を外国人にしてしまう偽りの教育」の「害毒」の一例なのだった⁽⁵⁷⁾。

ガンジーは、外国語がインドに押し付けられてきた理由についても述べている。「英国人が、自分たちの仕事を実行してくれる人々を必要としていたから」であり、「帝国の拡大を願っていたから」とガンジーは言う⁽⁵⁸⁾。英国人が事務職員を必要としていたとガンジーは述べるのである⁽⁵⁹⁾。その上で、ガンジーは西洋の価値観を内面化したインドの若者の現状について「英語の知識がなければインドが自由になることはほとんど不可能だと思こんでいる若者が、何百人」ともいると述べている⁽⁶⁰⁾。

ところで、英語を用いた教育による弊害を認識しているガンジーにとって、英語による教育は見直されるべきものであった。「インドはインド独自の気候と景色、自らの文学で栄えるべき」といった、インド国内に目を向ける必要性を示すガンジーの言葉からも推察されるように、ガンジーはインドでの使用言語として母国語（各州の言葉）にこだわった。「我々や子どもたちは自らの遺産を土台にして立ちあがらねばなりません。他から借りてくるなら、自分自身を貧しくすることになります」⁽⁶¹⁾とガンジーは述べている。また「国にはその国の言葉に宝を蓄えてもらいたい」⁽⁶²⁾と言う。

ガンジーは、既述のように英語そのものを否定しているのではない。「英語を学ぶインド人がいてはいけないと言っている」のでもない⁽⁶³⁾。英語を大切に考えているとも言うのだ⁽⁶⁴⁾。ただ、ガンジーは母国語をインド文化復興の基礎としたいのである。英語や他の言語による文学作品は土地の言葉への翻訳を通して学べるとガンジーは考えているのだ⁽⁶⁵⁾。

最後に、ガンジーはインドの人々に浸透した西洋の価値観とガンジーの考える自由との関係について述べている。「私にとって本当の自由とは、我々に深く染み込んでいる西洋の教育、西洋の文化、西洋の生活様式の支配から我々が自由になれたときに初めてやって来るものです」と述べるのであった⁽⁶⁶⁾。

(2) 手仕事を通しての教育

① 全人の形成

ガンジーの教育思想の特徴は、前述のように、手仕事、とりわけ糸紡ぎを重視し、それを通して人格の形成、全人の形成を目指したことにある。

先に、ガンジーは人格を養うことを教育の目的と考えていると述べたが、実はガンジーは途中から「人格の形成」に変えて「全人の形成」と表現している。弘中によれば「ガンディーは30年代の後半に入って、従来の人格形成に替え全面発達を提唱し出した。ガンディーはこれを『全人』の形成とも呼んだ」⁽⁶⁷⁾という。

i) 人格の形成

ガンジーは、南アフリカのフェニックス農場での教育体験を出発点として生涯に渡り教育に関わった。そして、そうした教育へのガンジーの関わり方は政治や社会問題と密接な関係をもっていた。ガンジーは、ジョン・ラスキンやレフ・トルストイ等の影響を受けているが、南アフリカでは、そのラスキンの影響を受けてフェニックス農場を設立（1904年）し、その後、トルストイの名に因んだトルストイ農場を設立（1910年）した。そして、その両方に学校を設立したのだが、トルストイ農場での学校は、インド居留民への差別（アジア人登録法案）に反対するサティヤグラハ運動への参加家族の子どもたちの教育の場として開校された。また、イギリス統治下にあるインド本国の復興・独立運動の一環としてガンジーは「国民教育運動」を展開し、インドに導入された西洋教育を否定すると同時にインドに相応しい教育のあり方を提唱したのだった⁽⁶⁸⁾。

ガンジーは、1930年代後半になって全人の形成という表現に変えるものの、一貫して教育の目的を人格の形成に置いてきた。そして、ガンジーが携わったり提唱する教育では、何らかの形で仕事を取り入れられていた。ガンジーの教育体験の初期である南アフリカ時代について、弘中は「南アフリカはガンディーの終生変わらなかった人格形成と、それにおける仕事の役割を重視する教育観を確立させるとともに、教育と政治との結合の必要性を認識させた点に意義を有するといえよう」⁽⁶⁹⁾と述べている。

では、ガンジーが重視した人格の形成とはどのようなものだろうか。ガンジーは人生で直面する様々な出来事を通して、その都度自らの考えを深めているように思える。したがって、ガンジーの強調する人格形成についても、ガンジー自身の体験の積み重ねとともに捉え方が深まっている可能性がある。だが、ガンジーが常に行動的であり、またガンジーの人生が変化に富んでいるために、人格形成についての捉え方の変化を追うことは難しい。そこで、ここでも『ガンジーの教育論』をもとに、ガンジーの人格形成について

の捉え方を見てみたい。

ガンジーは教育について、「健全な人格を養うのに役に立つ教育のみ、本物の教育と言うことができます」⁽⁷⁰⁾と述べている。そして、繰り返し指摘してきたように、「あらゆる教育は人格を養うことを目的にしなければなりません」⁽⁷¹⁾と言う。また続けて「宗教を通さずはどうすればこれができるのか、私にはわかりません」⁽⁷²⁾と述べている。ガンジーは人格形成において宗教を重視したのだ。

次に、人格についてだが、ガンジーによれば「人格者は、真実、非暴力、不邪淫、非所有、不偷盗、恐れないことなどの誓いを実際に守ろうと努力」すると言う⁽⁷³⁾。これらの誓いは、ガンジー自身の生き方を示すものでもあろう。

さらにガンジーは、先の「健全な人格を養うのに役に立つ教育」について、より具体的に述べている。「アートマン（魂）、つまり自分とは何者か、および神、真理を我々が知る（が）できるようにするのが本来の教育です」⁽⁷⁴⁾と言うのだ。そして、ガンジーは、この知識を獲得するために、文学や自然科学、あるいは芸術を学ぶことが必要だと思う人がいようが、「知識のどの枝もその目標として、自らを知るということがなければ」ならないと言う⁽⁷⁵⁾。またガンジーは、自分の設立した「アシュラムではそのようになっています」とも述べている⁽⁷⁶⁾。

このように、ガンジーの考える人格形成とは、真実や非暴力等を生き方として実践できるようになることであり、自分を知ったり神、真理を知ったりできるようになることである。そして、そのための教育には宗教が重視されるのである。

加えて、ガンジーの人格形成を目的とする教育において忘れてならないのが手仕事である。ガンジーが手仕事を重視していることは、同書の随所から読み取ることができる。

なお、ガンジーは『自叙伝』の中で人格形成が精神の開発を意味すること

も示している。「精神を開発することは人格を築くことであり、人を神の知識及び自己実現に向かって行動させることである」⁽⁷⁷⁾と言う。

ii) 全人の形成

ガンジーの人格形成の概念は、後の全人形成という概念として結実したように思われる。

ガンジーは全人教育を提唱したのだった。それは全人的な発達を目指すもので、ガンジーによれば、人が全体として成長するには、知性・肉体・魂の「三つが適切に調和の取れた協力関係にあることが必要」⁽⁷⁸⁾と言う。そして、ガンジーは「それこそが本当の意味で経済的な教育」⁽⁷⁹⁾と言う。ガンジーはまた、こうした全人教育を手仕事（職業訓練）を通して実現しようと考えたのであった。

ガンジーはまず、「本物の教育は、教育される少年、少女から最善を引き出さねばなりません」⁽⁸⁰⁾と述べる。そして、それは「子どもたちの頭にバラバラの、必要もない情報を詰め込むことによってできる」ことではないと考える⁽⁸¹⁾。ガンジーにとっては「一つないし数種類の仕事という媒体に携わること」が「子どもたちを全人的に発達させる最善の方法」なのであり、またそれ故「時間割りはすべて職業訓練を中心に編成されるべき」なのである⁽⁸²⁾。

ガンジーはまた、知性を養う方法についても言及している。ガンジーは、「科学的なやり方で職人技を学ぶのが知性を養う最も速いやり方」⁽⁸³⁾と考えている。また、手、足、目、耳、鼻などの「子どもの肉体の各器官を知的に用いることが、子どもの知性を発達させる最善にして最も速いやり方」⁽⁸⁴⁾とも捉えている。そして、「知性と体の発育が、魂の目覚めに対応して手を取り合って」進む場合、すなわち「子どもの肉体と精神の力を引き出すことと並行して知育が行わる場合にのみ、知性を適切に全般的に発達させる」ことができるのだとガンジーは強調している⁽⁸⁵⁾。知性を発達させるには「肉体・知性・魂のそれぞれが持つさまざまな力を適切に連携させ、調和させる」こ

とが大事なのである⁽⁸⁶⁾。そして、これこそがガンジーの考える全人的な発達（全人形成）なのであった。

ガンジーは、人間の発達を考える上で近代において排除されてきた魂や精神の力に注目していたのだった。

②手仕事

ガンジーは手仕事を重視していた。南アフリカで最初に教育に携わった時から、ガンジーは仕事を取り入れていたが、インドでは手仕事として主に糸紡ぎに着目した。

ガンジーにとって教育に携わる様々な体験は、手仕事の教育的価値に気づかせ、また確信させてくれるものであった。それは同時に、ガンジー教育思想の最大の特徴である、手仕事により全人形成を目指すという考え方（手仕事を通しての教育）を形成していく過程でもあったと言える。

再び『ガンジーの教育論』に依拠して、手仕事についてのガンジーの見解を見てみよう。

ガンジーは初等教育について、「子どもたちを全体的に発達させるために、あらゆる訓練はできるかぎり利益を上げられる職業を通して行います」⁽⁸⁷⁾と述べている。ガンジーによれば、「職業は二重の目的を果たす」ことになるのだという。つまり「生徒が自ら働いて生産した物で授業料を払えるように」するのと同時に、「学校で学ぶ職業を通して、子どもの中の全体的人間性を発達させる」のである⁽⁸⁸⁾。

ここで注目すべきは、「利益を上げられる職業」という点であろう。ガンジーが仕事を通して全人形成を目指しているのは前述の通りだが、ここでの新しさは、自らの労働によって子どもたちが授業料を賄えるようにするという目的を加えている点にあるのだ。

ガンジーは、「学ぶのが容易で経費をそれほど支出することなく取りかかれる仕事」として、「綿、羊毛、絹を加工するあらゆる過程、つまり収集から始

まって、洗淨、綿繰り（綿の場合）、カーディング（梳綿・梳毛）、糸紡ぎ、染色、糊付け、整経（経糸の準備）、より合わせ、図案製作、機織り」その他を挙げている⁽⁸⁹⁾。

ガンジーが実現したかったのは「教育を与えると同時に、失業の根を断ち切る」ことだった⁽⁹⁰⁾。だからこそガンジーは職業の訓練を重視したのである。授業料の支払いだけでなく、学んだ職業での将来の生計の維持をも視野に入れた教育を考えたのだった。もちろん、こうした背景にはインドの村の貧困という大きな問題が横たわっていた。

ガンジーは、「教育の目的は自己を開発すること」にあるが、そのことには「生計を立てる能力の開発」も含まれると述べている⁽⁹¹⁾。また、「本物の教育とは、靈性、知性、経済力の三つすべての能力を同時に発達させるものです」⁽⁹²⁾とも述べている。ガンジーの考える初等教育では、子どもたちがパンを稼げるようになることが重視されたが、ガンジーにとって経済力は、靈性、知性と同時に発達させるものとして考えられていたのだった。

ガンジーはまた、「インドが無料の初等義務教育を行うべき」であり、その実現には「子どもたちに有益な仕事を教えるしかない」と考えていた⁽⁹³⁾。そして、「その仕事を活用して、子どもたちの頭脳、肉体、靈力を養う」ことを考えたのだった⁽⁹⁴⁾。ガンジーの言う仕事や職業とは手仕事（手工芸）を指すのだが、ガンジーは、子どもたちにそうした手仕事を教えることによって学校（初等教育）をも自分たちで賄えるようにしようとしたのだった。また、ガンジーは「職業訓練によって生徒の頭脳は絶えず活発に働き、鋭敏に反応します。同時に、職業訓練が生徒の知性を引き出す手段ともなっています」⁽⁹⁵⁾と述べるなどしており、それらの記述からは、ガンジーが「頭脳、肉体、靈力」を統合できるものとして手仕事を位置づけていたことが伺える。

ガンジーの提唱する教育では、前述のように、あらゆる訓練は利益を上げられる職業を通して行うと考えられている。足し算、引き算、九九といった算術等の訓練と職業訓練とは別個に学ばれるのではない。ガンジーは「手工

芸から初めて、ほかのことは補助的にやる」のではなく、「一般教育全体を手工芸を通して、段階的に同時に行おう」としているのだ⁽⁹⁶⁾。そして、このような手工芸を通して人を全体的に発達させようとする考えは、「全く新しい独創的なもの」⁽⁹⁷⁾とガンジー自ら述べている。

以上から、ガンジーの提唱する手仕事を通しての教育には二つの側面があることが明らかとなった。一つは、学校での職業訓練を通して授業料を賄い、併せて将来の仕事への道筋をつけるという側面。また、学校を賄うという側面。これらは、経済力と同時に自立・自治の精神を養うものであった。もう一つは、全人形成を目指すという側面。「靈性、知性、経済力の三つすべての能力を同時に発達させる」もの、あるいは「子どもたちの頭脳、肉体、靈力を養う」ものとして手仕事が位置づけられたのであった。手仕事のもつ教育的意味は大きいのである。

③糸紡ぎ

ガンジーにとって糸紡ぎは特別の意味をもっていた。

ガンジーは、インドの独立に向けて、アヒンサー（不殺生・非暴力）によってスワラージ（自治）を築こうとした。その方法としてガンジーは、インドの家庭で以前に使われていたチャルカ（手紡ぎ車）で綿糸を紡ぎ、その糸でカディと呼ばれる手織りの布を作ることを提唱したのだった。チャルカはアヒンサーに基づくスワラージの象徴だったのである。

こうした糸紡ぎを、ガンジーは学校教育でも重視した。ガンジーは、「すべての人に適する単純な手仕事で、インド中で必要とされている」のが「綿を用意する過程までも含めた糸紡ぎ」だと考えた⁽⁹⁸⁾。そして、教育施設で糸紡ぎを導入すれば三つの目的を達成できると考えたのだった。すなわち「教育費を自分で賄えるようになり、子どもたちの身心を鍛え、外国の糸や布を完璧にボイコットする道を開くことになります」⁽⁹⁹⁾とガンジーは述べるのであった。さらに、子どもたちは「自信を持って自立した人間」になるとも述べ

ているのである⁽¹⁰⁰⁾。

学校での糸紡ぎの意義は、当然ながら前に述べた手仕事のもつ教育的意味と重なるのだが、さらに三つ目の目的のように糸紡ぎは政治とも関わっていたのであった。

3. ガンジーの教育思想の現代的意義

ガンジーは、イギリスの植民地支配下のインドで取り入れられた西洋式教育を否定し、インドに相応しい教育を考えた。それは、手仕事を通して全人形成を目指すという教育であった。

その教育は、当時のインドの教育制度を根本的に問い直そうとするものだったが、同時にそれは現代の日本の教育のあり方を見直させてくれるものでもある。ガンジーの提唱した教育は、古くないばかりか、教育の未来への展望を開いてくれる可能性をもった新しいものと言える。

(1) 「現代の預言者」ガンジー

マドゥ・スリ・プラカシュ (Madhu Suri Prakash) とグスタボ・エステバ (Gustavo Esteva) は著書『学校のない社会への招待』の中で、ガンジーを現代の預言者の一人と捉えている。

プラカシュらによれば、「預言者」とは「現在を明晰に分析する眼を持ち、根拠が定かでない苦境をはっきりさせることのできる男性や女性を示唆し、「現在を照らし出すその光によって、物事をはっきり見ることができる」と述べている⁽¹⁰¹⁾。そして、こうした現代の預言者として、ガンジー、エウル、イリイチ、オーウェル、バーリーなどを挙げている。これらの「現代の預言者は、現代の諸制度やテクノロジーが民衆とその文化、環境、人間の条件にダメージを与えていることを先見の明を持って捉えている」⁽¹⁰²⁾とプラカシュらは言うのである。そして「彼らは、それまで誰も歩もうとしなかった道をさし示す」⁽¹⁰³⁾とも述べるのであった。

同書では、先住民族等の生活の中にある学びに注目している。生きることがすなわち学びとなってきた彼らの生活世界の中に、学びの本質を捉えようとしているのである。著者は「まえがき」で、「本書は草の根で生き、学ぶ、ごく普通の人びと、民衆文化の中でいまも謳歌されている人間の幸福を祝福しようとするもの」⁽¹⁰⁴⁾と書いている。地域に生き、その地域に伝統的に受け継がれてきた知恵や技を学んでいくという民衆の文化を讃えているのだ。一方で著者は、このような学びの本質という観点から、教育という制度を一般的に批判しているのであった。

本稿で見てきたように、ガンジーは学校自体は否定していないように見受けられるものの、インドの伝統文化から切り離された西洋式の教育については厳しく批判していた。プラカシュらも著書で、本稿の「伝統文化の否定」で引いたガンジーの文章を取り上げている⁽¹⁰⁵⁾。

ガンジーは、読み書き中心の教育や英語を用いた教育への盲目的崇拝を批判したが、その先にガンジーが展望した教育とは、インド古来の教育の目的であった「共同体の一員として生活を続けていける人を養成」することであったと言える。

現代の日本でも、ガンジーが批判したような教育と生活が分離した状況が続いている。学校教育では、それぞれの地域で育まれてきた知恵や技の継承に重きが置かれることはほとんどない。私たちの暮らしの中に、生きることが学びとなるような環境を回復していくことが課題となるだろう。

(2) 全人形成と手仕事

ガンジーは、全人形成を目指す教育のあり方についても示唆を与えてくれる。

ガンジーの全人形成の捉え方は、近代の教育が排除してきた大事なものに気づかせてくれた。また、全人教育（手仕事を通しての教育）を実現するには、現代の教育制度を根本的に変える必要があることにも気づかせてくれた

のだった。

ガンジーは、人が全人的に発達するには、知性・肉体・魂の「三つが適切に調和の取れた協力関係にあることが必要」だと考えていた。これら三つは、頭脳・肉体・霊的力とも表現されていた。また、魂については精神の力と表現されることもあった。ガンジーの特徴は、三つをバラバラに発達させるのではなく、「それぞれが持つさまざまな力を適切に連携させ、調和させる」（同時に発達させる）という考え方にあった。そして、それを手仕事を通して行うという点に斬新さがあった。

近代の教育では、ガンジーの注目した魂、霊的力、精神といったものが排除されてきた。魂や霊的力とガンジーが述べているものは、知性に縛られない人間の感情や直感といったものなのだろうが、そうした目に見えないもの、測定不能なものを近代の教育は取りこぼしてきたのだった。したがって、人間の発達におけるこれらの重要性が現代では認識されにくくなってしまっているのである。

また、ガンジーは、知性・肉体・魂の三つを調和的に同時に発達させるものとして、手仕事に注目した。ガンジーは手仕事を、人々の自治・自立という観点からも重視したが、何より全人的発達を促すものとして位置づけたのであった。そして、このような発達観に基づいて、ガンジーは一般教育全体を手工芸を通して行おうと考えたのであった。

現代の日本の教育では、ガンジーの言うような仕事は重視されていない。また、教科ごとに独立して学ぶのが一般的である。ガンジーの提唱する教育を実現しようとするなら、手仕事という肉体労働を通じて教科についても学べていくような教育制度への転換が求められるだろう。

(3) 生命尊重の生き方

ガンジーの人生は真理を探究する実験であった。そして、その真理と密接な関係にあるアヒンサー（非暴力）は、ガンジーの生き方すべての基本とな

るものだった。

真理やアヒンサーの概念を十分に理解したとは言い難いが、両者は生命の尊重を表した用語のように受け止められた。

イーシュワランが、サティヤー（真理）について、ガンジーにとってそれは『すべての命はひとつ』という、存在のもっとも深い真理を意味するものだった」と述べているように、ガンジーは命をひとつのものと捉えていた。また、アヒンサー（非暴力）には、すべてを排除しないという意味や「自分を憎む人を愛する強さ」等が含まれていた。これらからは、すべての生命はつながっていて尊いものだというガンジーの生命観が伺える。

ガンジーの生き方は生命尊重の生き方と言えるのではなからうか。そして、そうした生き方は、他者や自然との関係が希薄になり、他者や自然の生命、さらには自分自身の生命をも感じられにくくなっている現代社会において、とりわけ大事にされるべき生き方であろう。

ガンジーが注目した糸紡ぎは、自然や自分の生命に対して鋭敏になれる可能性をもっている。なぜなら、綿糸を紡ぐ行為は人間と自然（大地から育った綿）との対話であり、そこでは紡ぎ手が自分の身体内部のリズムを実感できるからである。

また、糸紡ぎは、一人ひとりが自分のペースで取り組める仕事である。自分にとって心地よい仕事の仕方が認められることは、生の基盤となる安心感とともに労働の喜びももたらしてくれる。生命の感覚、生の実感を与えてくれるものなのである。

生命の感覚を鋭敏にしてくれる手仕事を教育に取り入れることの意味は極めて大きい、と言えよう。

おわりに

本稿では、前稿に引き続きガンジーとの対話を試みた。ガンジーから学んだことは今回も多かった。学びとは何か、人が育つとはどういうことなのか、

といった教育の本質的な問題について多角的に考えさせてくれた。そして、人々の全人的発達を目指す教育に取り組むのであれば、現代の教育のあり方を根本から変える必要があることも認識できた。手探りしながら、学びを育て合っていきたい。

注

- (1) エクナット・イーシュワラン著、スタイナー紀美子訳『人間ガンディー — 世界を変えた自己変革』東方出版、2013年、p. 5
- (2) 同上、p. 5
- (3) 同上、p. 5
- (4) 同上、p. 5
- (5) ガンディー、タゴール著、弘中和彦著訳『万物帰一の教育』（長尾十三二監修、世界新教育運動選書30）、明治図書出版、1990年、pp. 3-4
- (6) 同上、p. 40
- (7) 同上、p. 40
- (8) 豊田千代子「ガンジーの思想について」『駒澤大学教育学研究論集』第29号、2013年3月、p. 47-54
- (9) マハトマ・ガンジー著、蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』（中公文庫）中央公論新社、2010年、pp. 14-15
- (10) 同上、p. 17
- (11) 同上、pp. 15-16
- (12) イーシュワラン、前掲書、p. 53
- (13) 同上、p. 53
- (14) 同上、p. 53
- (15) 同上、p. 53
- (16) 同上、p. 53
- (17) 同上、pp. 53-54

- (18) 同上、p. 54
- (19) 同上、p. 54
- (20) 豊田、前掲論文、pp. 49-50
- (21) イーシュワラン、前掲書、p. 106
- (22) 同上、p. 106
- (23) 同上、p. 106
- (24) 同上、p. 111
- (25) 同上、p. 111
- (26) サティヤーグラハの起源等については以下に詳しい。ガンジー（蠟山訳）、前掲書、pp. 265-268、イーシュワラン、前掲書、pp. 61-74、長崎暢子『ガンディーー 反近代の実験』（現代アジアの肖像8）、岩波書店、1996年、pp. 48-52。
- (27) イーシュワラン、同上書、p. 70
- (28) 同上、p. 70
- (29) 同上、p. 70
- (30) 同上、pp. 70-73
- (31) 同上、p. 73
- (32) 同上、p. 73
- (33) 弘中和彦「マハトマ・ガンジーの『手仕事を通しての教育』の意味について」『比較教育文化研究施設紀要』38号、九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設、1987年3月、p. 19
- (34) 同上、pp. 19-34
- (35) 同上、p. 28
- (36) M・K・ガンジー著、片山佳代子編集・翻訳『ガンジーの教育論』ブイツーソリューション（星雲社発売）、2009年、p. 25
- (37) 同上、p. 24
- (38) 同上、p. 24
- (39) 同上、p. 25

- (40) 同上、p. 25
- (41) 同上、p. 29
- (42) 同上、p. 25
- (43) 同上、p. 26
- (44) 同上、p. 11
- (45) 同上、pp. 11－12
- (46) 同上、p. 12
- (47) 同上、p. 12
- (48) 同上、p. 134
- (49) 同上、p. 139
- (50) 同上、p. 134
- (51) 同上、p. 134
- (52) 同上、p. 134
- (53) 同上、p. 136
- (54) 同上、p. 136
- (55) 同上、p. 139
- (56) 同上、p. 139
- (57) 同上、p. 139
- (58) 同上、p. 140
- (59) 同上、p. 140
- (60) 同上、p. 142
- (61) 同上、p. 138
- (62) 同上、p. 138
- (63) 同上、p. 141
- (64) 同上、p. 137
- (65) 同上、p. 138
- (66) 同上、p. 144

- (67) ガンディー、タゴール、弘中、前掲書、p. 41
- (68) ガンジーの教育への関わりについては、同上書、pp. 17-39に詳しい。
- (69) 同上、p. 21
- (70) ガンジー、片山、前掲書、p. 20
- (71) 同上、p. 29
- (72) 同上、p. 29
- (73) 同上、p. 16
- (74) 同上、p. 51
- (75) 同上、p. 51
- (76) 同上、p. 51
- (77) ガンディー、タゴール、弘中、前掲書、p. 75。弘中、前掲論文、p. 23も参照されたい。
- (78) ガンジー、片山、前掲書、p. 68
- (79) 同上、p. 68
- (80) 同上、p. 64
- (81) 同上、p. 64
- (82) 同上、p. 65
- (83) 同上、p. 65
- (84) 同上、p. 65
- (85) 同上、p. 65
- (86) 同上、p. 66
- (87) 同上、p. 71
- (88) 同上、p. 71
- (89) 同上、p. 71-72
- (90) 同上、p. 75
- (91) 同上、p. 72
- (92) 同上、p. 83

- (93) 同上、p. 77
- (94) 同上、p. 77
- (95) 同上、p. 78
- (96) 同上、p. 94
- (97) 同上、p. 95
- (98) 同上、p. 98
- (99) 同上、p. 98
- (100) 同上、p. 98
- (101) マドゥ・スリ・プラカシュ、グスタボ・エステパ著、中野憲志訳『学校のない社会への招待 — <教育>という<制度>から自由になるために』現代書館、2004年、p. 204
- (102) 同上、p. 205
- (103) 同上、p. 205
- (104) 同上、p. 8
- (105) 同上、p. 21